

1. はじめに

ブラジルポルトガル語(BP)では、(1)で示すように、間接疑問縮約と言われる形式で疑問詞の後にコピュラが現れることが可能である。容認可能なコピュラの時制については、(1a)-(1c)と(1d)では違いが観察される。¹⁾

- (1) a. Alguém dançou com a Maria, mas eu não sei quem ??é / foi.
 someone danced-PERF with but I NEG know who is / was-PERF
 “Someone danced with Maria, but I don’t know who it was.”
- b. A Maria viu alguém, mas eu não sei quem ??é / foi.
 saw-PERF someone but I NEG know who is / was-PERF
 “Maria saw someone, but I don’t know who it was.”
- c. A Maria dançou com alguém, mas eu não sei com quem ??é / foi.
 danced-PERF with someone but I NEG know with whom is / was-PERF
 “Maria danced with someone, but I don’t know who it was.”
- d. A Maria dançou com alguém, mas eu não sei quem é/??foi.
 danced-PERF with someone but I NEG know who is/was-PERF
 “Maria danced with someone, but I don’t know who.”

(1a)-(1c)では完全過去形のコピュラ(“foi”)は文法的であるが、現在形(“é”)は容認度が低い。これと対照的に(1d)では、現在形では容認されるが、過去形では容認度が下がる。(1d)は(1c)の前置詞“com”(“with”)が現れていない文であり、前置詞残留(preposition stranding)に関して問題となる例と考えられる。(1d)については、関係節化と分裂文からの派生で分析する立場もあるが、本稿では(1d)と同じ方法によって(1a)-(1c)のコピュラの時制は説明できないことを示す。(1a)-(1c)の派生について、西語・日本語の例との比較を通して考察を加え、(1d)とは異なったタイプの分裂文からの派生で生成されることを示し、コピュラの時制の違いは派生の違いの結果であることを論じる。また、機能範疇 Event Topic の存在とその性質、ならびに、前置詞残留の違いから言語間の違いが導き出される可能性を指摘する。

2. BPにおける関係節化と分裂文

Nevins & Rodrigues (2006, N&R)では、BPの分裂文は関係節化から形成され、関係節で前置詞が省略されることから、BPは分裂文で前置詞残留を許すとしている。N&Rは、(2a)の例を挙げて関係節化から分裂文が派生されると述べている。(2b)は関係節化で前置詞省略が起こることを表している。(2c)は前置詞“com”(“with”)が現れた関係節であるが、(2b)では前置詞が現れていない。

- (2) a. Quem é (a pessoa) que o João beijou (N&R)
 who is the person that kissed
- b. Eu conheço a menina que o João dançou. (N&R)
 I know the girl that danced “I know the girl with whom João danced.”
- c. a menina com quem o João dançou.
 the girl with whom danced “the girl with whom João danced”

N&Rの分析によると、(1d)のコピュラが現在形で現れた文は(3)の下線部で示す分裂文の構造から派生され、“que”(“that”)以下の節を削除することで生成されると考えられる。

- (3) A Maria dançou com alguém, mas eu não sei quem é que a Maria dançou.
 danced-PERF with someone but I NEG know who is that danced-PERF

N&R は、(1d)で完全過去形のコピュラが容認されない事実について、問題となる人物が既に存在していないと解釈されることがその理由と捉えて以下の例との違いを指摘している。

- (4) O João saiu com alguém que faleceu na semana passada, mas eu não sei quem foi.
 went-PERF-out with someone that died last week but I NEG know who was-PERF
 “João went out with someone who died last week, but I don’t know who it was.”

一方、(1a)-(1c)では完全過去形のコピュラが容認可能であり、この例については、(1d)のケースのように意味の問題に起因するものと考えすることはできない。また、(1a)-(1c)に関しては、(1d)と同様の操作でそれぞれ(5)の下線部で示す分裂文から“que” (“that”)以下の節を削除した場合、現在形のコピュラの例が示すように容認度が下がる。

- (5) a. Alguém dançou com a Maria, mas eu não sei quem é que dançou com a Maria.
 someone danced-PERF with but I NEG know who is that danced-PERF with
 b. A Maria viu alguém, mas eu não sei quem é que a Maria viu.
 saw-PERF someone but I NEG know who is that saw-PERF
 c. A Maria dançou com alguém, mas não sei com quem é que a Maria dançou.
 danced-PERF with someone but NEG know with whom is that danced-PERF

以上の例から、(1a)-(1c)が(1d)と同じ統語操作で派生されると仮定することは難しい。以下のセクションで、西語と日本語との比較から、(1a)-(1c)では(1d)とは異なったタイプの分裂文から派生されることを示す。

3. Event Topic の仮定

3.1. 西語と日本語

Sáez (2005)は BP の(1c)に対応する西語の例について分析、(6)の下線部は(7)で示すタイプの分裂文の構造から派生されると仮定している。(8)で示す基底構造からの派生プロセスを提案し、(8)の構造において TP が削除されることにより(6)が生成されるとしている。

- (6) María habló con alguien, pero no sé con quién fue.
 talked-PERF with someone but NEG know with whom was-PERF
 “Maria talked with someone, but I don’t know with whom.”

- (7) fue con quién que habló.
 was-PERF with whom that talked-PERF

- (8) [_{Force P} [_{IntP} con quién_i [_{EvTopP} *pro* [_{EvTopP} fue_j [_{FocP} t_i [_{Foc} [_{FinP} [_{TP} t_j [_{CP} que habló t_i]]]]]]]]]]]

(8)では、Event Topic Phrase (EvTopP)²⁾、ならびに、Interrogative Phrase (IntP)を Rizzi (1997)で提案された節構造の中で新たに仮定し、Spec-EvTopP に event *pro* が生成され、コピュラが EvTop の主要部に移動することを提案している。Sáez は、これにより以下の3点に関して日本語との違いを導き出している。

i) ゆるい同一性(sloppy identity)の解釈：

event *pro* が談話のトピックと関係し削除部分には含まれないことから、(9)の下線部においてゆるい同一性の解釈が不可能であることを説明している。Sáez が指摘するように、(10a)の解釈は可能であるが、(10b)は不可能である。

- (9) Ana no ha revelado a Diego con quién bailó, pero Pedro sí le ha dicho con quién fue.
 NEG has told to with whom danced-PERF but yes him has told with whom was-PERF
 “Ana didn’t tell Diego with whom she danced, but Pedro did.”

- (10) a. Pedro told Diego with whom Ana danced.
 b. *Pedro told Diego with whom he (=Pedro) danced.

Sáez の分析では、日本語の以下の文は EvTopP が存在しないため、(10)の二つの解釈が可能となる。

(11) アナはディエゴに誰と踊ったか言わなかったが、ペドロは誰とだったか言った。

ii) コピュラの時制：

(12)の例が示すように、コピュラは *event pro* が指す先行詞節の時制と一致することから、Sáez はコピュラの時制の形態素は EvTop^o で認可されると提案している。

(12) Ana habló con alguien, pero no sé con quién fue/ *era / *es.
talked-PERF with someone but NEG know with whom was-PERF / was-IMPERF / is
“Ana talked with someone, but I do not know with whom.”

日本語ではこのようなコピュラの時制に関する制限はなく、(13)が示すように、コピュラは現在形でも可能である。Sáez は、この例について、日本語には EvTopP がなくコピュラの移動が起こらないことがその理由と捉えている。

(13) 花子は誰かと話したが、私は誰とだった／だかわからない。

iii) 先行詞節の述語のタイプ：

Sáez は、Spec-EvTopP に位置する *pro* はイベント的性質(eventive nature)をもち、先行詞節のイベント(event)を指さなければならないとしている。(14)で示すように、先行詞節の述語がイベントを表さない例ではコピュラが現れると文の容認度が下がる。

(14) ??Ana se parece a alguien, pero no sé a quién es.

SE seem to someone but NEG know to whom is “Ana resembles someone, but I don’t know who.”

3.2. BP

EvTop、ならびに、(8)の派生プロセスを仮定することで、(1a)-(1c)の BP の例が説明できるか検討する。(15)が示すように、BP においても西語の(7)と同じタイプの分裂文の構造が存在する。

(15) foi com quem que falou.

was-PERF with whom that talked-PERF

ゆるい同一性の解釈については、BP も西語と同様の現象が観察され、(16)は(10a)の解釈のみを持つ。

(16) Ana não disse a Diego com quem dançou, mas Pedro disse com quem foi.

NEG told to with whom danced-PERF but told with whom was-PERF

“Ana didn’t tell Diego with whom she danced, but Pedro did.”

コピュラの時制に関しては、(1a)-(1c)の例が示すように西語と同様に先行詞節の時制と一致することが義務的である。先行詞節の述語のタイプについては、西語と BP で違いが観察され、BP では(17)が示すように先行詞節に個体述語(individual predicate)が現れることが可能であり、述語のタイプはイベントに限られない。

(17) Ana se parece com alguém, mas não sei com quem é.

SE seem with someone but NEG know with whom is

“Ana resembles someone, but I don’t know who.”

BP の(1a)-(1c)の例については、ゆるい同一性、コピュラの時制に関する西語の例との共通性から、(8)と同様の派生プロセスを経て生成されると考えられる。しかし、述語のタイプに関して違いが見られ、Spec-EvTopP に位置する *event pro* の性質に関して BP と西語における違いが示唆される。*event pro* の素性に関して、西語では[+ eventive]、BP では[± eventive]の素性を仮定した説明がどの程度可能か今後の検討課題としたい。

4. まとめ

BP の(1a)-(1c)と(1d)は異なったタイプの分裂文の構造から派生され、コピュラの時制に関して、(1d)では N&R で提案された関係節化と分裂文からの派生による説明が可能であるが、(1a)-(1c)では Event Topic の性質からコピュラの時制が決定されることを示した。Event Topic を仮定することで西語・BP・

日本語の共通性と違いに関するいくつかの現象が説明可能であるが、西語と BP では event *pro* の性質が異なる可能性を指摘した。なお、(1d)タイプの文についても、西語と BP では違いが観察され、(1d)に対応する以下の西語の例はコンピュータの時制にかかわらず容認度はそれほど高くない。

(18) *María bailló con alguien, pero no sé quién ?es/?fue.*
danced-PERF with someone but NEG know who is / was-PERF
“María danced with someone, but I do not know who.”

Almeida & Yoshida (forthcoming)、N&R 等の研究では、西語と BP の文法で観察される前置詞残留の違いに言及しているが、Event Topic、event *pro* の性質との関連性についても今後の研究課題としたい。

注：

*BP のデータに関しては Mauro Neves 氏、Lilian Mendes 氏、西語のデータについては Ruiz Tinoco 氏、Hernández Santiago 氏にご協力頂いた。ここに謝意を申し上げます。なお、本稿の内容については筆者のみが責任を負うものである。

1. (1)の完全過去形 “foi”が用いられている例は、Almeida & Yoshida (forthcoming)からのものである。
2. Sáez の EvTopP は Balilico (2003)の Topic Phrase (TopP)の仮定に基づいている。

略語：NEG:否定語、PERF:完全過去、IMPERF:不完全過去

引用文献：

- Almeida, D. and M. Yoshida. forthcoming. A Problem for the Preposition Stranding Generalization. *Linguistic Inquiry* 38(2).
- Basilico, D. 2003. The Topic of Small Clause. *Linguistic Inquiry* 34:1-35.
- Nevins, A. and C. Rodrigues. 2006. There are Two Sources of IP-Deletion in Brazilian Portuguese. Only One Allows P-stranding. Ms. Universidade Federal de Alagoas, Maceio.
<<http://www.unicamp.br/iel/romanianova/abstracts/abstractNEVINS&RODRIGUES.pdf>>
- Rizzi, L. 1997. The Fine Structure of the Left Periphery. In *Elements of Grammar*, ed. L. Haegeman, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Sáez, L. 2005. Sluicing with Copula. In *Theoretical and Experimental Approaches to Romance Linguistics: Selected papers from the 34th Linguistic Symposium on Romance Languages (LSRL), Salt Lake City, March 2004*, eds. R. S. Gess and E. J. Rubin, 213-236. Amsterdam: John Benjamins.